

嚮者文學第一版を東京大學豫備門長杉浦重剛君に呈し高評を辱す
今再梓に臨み謹て卷末に上して讀者の參考に供す答辯の如きは追
次撰定する所を俟て自ら明ならん

著者識

一 綱紀云々どあれども明解なきを以て其意味判然せず故に此語を以
て主眼とする數節を批評するに由し无し綱紀は人の作出せるものに
は非すと云ふ意歎第三節の終りに綱紀は前項なり人性は後項なりな
ごあるを見れば人に先つて存在するもの、如く見ゆ尙くは明解あり
たし

一 保合は理學外の事歎我輩の聞くところによれば分析と保合とは理
學の二法にして即ち化學にも分析と保合とあり數學に於ても微分は

分析に屬し積分は保合に屬す其他類多し尤も保合は分析に比すれば
困難あること多し故に微分には一般の方法あれども積分には一般の
方法あるもの少し化學に於ても亦然り如何なる複雑物にても之を分
析するは之を保合して製作するに比すれば遙に容易なり

一 美術云々天地間の事物に就て人間の今日まで得たる智識により(即
ち分析及び保合法等)研究し未だ明解する能はざることば人其妙を感
ずること深し(己の及ばざる人を欽慕すると一般然れども他日理學上
の研究によりて其明解を得るに到らば左程に其妙を感せざるに到ら
ん歎何に致せ今日に在て我々が天地間の事物に就て有する智識は蓋
し極小部分なるべければ之を根據となして妄に事物の理を斷定する
は我輩の敢てせざる所なり

一 四十九丁(オ)より(ウ)に掛けて物理化學以下云々人は果して物の内に

含蓄せられざる欺人は動物なり已に動物たる以上は物理を推て之を講究する何の不可あらん
筆力縦横趣向新奇只恨失於奇耳到著者之深意則蓋有不可端倪者矣

明治十八年秋分前七日

天台道士妄言

嚮者呈拙著文學論于議官大久保公公書高
作於扇面被賜今將再梓因縮寫而代跋辭



斗 文 法 志 時

理 通

本 來 生 性 第 一

和 白

可也
 人子為逆列
 年一竟
 公堂手控中
 本館代去似
 有が又笑まじい之いふ

聖門哲學論

第一節 哲學上の四大問題

凡そ哲學の問題は千端萬緒なりと雖も要するに善とは何、利とは何、美とは何、正とは何といふ事を究定せむとするに局を結ばざるは無し。哲學をして人世必要の物たらしむるも、一に此の四事を決する所以の者外に無きに因る。哲學は善美利正の學なり。

然るに近年西洋に於て理學大功ありてより、事物を分析解釋して論ずるの法盛に行はれ、善美利正の事の如きも、之を以て事物各、備ふる所の性質數多ある中に屬する者なりと爲すの説類に出つ。蓋し此の四徳を以て各事各物の具ふる所の性質を分解せば則ち知ることを得べき所なりとするなり。是に於てか道德倫理の上に太だしき昏迷を生して、更に歸着

する所を知らず、今日の歐米には基督教の外に道德倫理と稱するに足る者全く無きに至る。

例へば茲に男女同權を以て善き事なりと言ふ人ありとせむに、其人に何を以て之を善とするやと問はゞ答へて曰はむ、女子に自由を與ふるが故にと、即ち是れ男女同權といふ事を分解し、其中に女子に自由を與ふといふ性質あるを指して善と做すものなり。されば次に女子に自由を與ふる事は何を以て善なりやと問はゞ、女子に快樂を與ふるが故にと答へむ、是れ亦分解論なり。次に女子に快樂を與ふる事は何を以て善なりやと問はゞ、最大數の最大快樂を生ずるに幾きが故にと答へむ、是れ亦分解論なり。次に最大數の最大快樂を生ずる事は何を以て善なりやと問はゞ、快樂は各人の欲する所なるが故にと答へむ、是れ亦分解論なり。次に各人の欲する所は何を以て善なりやと問はゞ、又更に他の答辭を爲して底

止する所を知らず。若し然らざれば中途にして答辭を爲すこと能はずして自ら破れむ。自ら破れざれば底止せず。孰れにしても歸着する所無きなり。

美の何たるに至りても均しく難澁なる義あるを知る可し。此に西洋風の繪畫を美とする人ありとせむに、何を以て之を美とするやと問はゞ、答へて曰はむ、精巧を盡せるが故にと、次に精巧を盡せる事は何を以て美なりやと問はゞ、能く自然を寫すが故にと答へむ。次に能く自然を寫す事は何を以て美なりやと問はゞ、自然の物の能く心を喜ばすが故にと答へむ。次に心を喜ばす事の美なる所以を問はゞ、又他の答辭を爲し、之を爲す所以を問はゞ、又更に他の答辭を爲して底止する所を知らず、若し底止せば、其論は是に至り自滅せむ、知る可し分解の論の効無きことを。又美の係る所、有形物のみに止まらず、人の行爲、國の風俗等の如き無形物にも

美なるあり、醜なるあり。此に支那の風俗に比すれば西洋の風俗は美なりとする人ありとせむに、何を以て然か言ふやと問はば、東西の風俗を分解して答へむ、西洋の交際、東洋の交際よりも美なるが故にと。次に西洋の交際は何を以て美なりやと問はば、又之を分解して禮儀に拘泥せざるが故にと答へむ。禮儀に拘泥する事は何を以て醜なりやと問はば、是れ無用の事なるが故にと答へむ。されば又無用なる者は何を以て醜にして有用なる者は何を以て美なりやと問ふことを得べく、有用無用を分解し其中の一點を擧げて之が答辭と爲さば、又更に其點を美とするの理由を問ふことを得べし、而して若し答辭無きに至らば、終に美醜の何たるを知り難きこと言を竣たず、若し尙ほ答辭を重ねとも、歸着する所無きに於ては一なり。

利と正との何たるに至りても分解論の同様に無効なることを見るは易かるべし。當今世上に行はるゝ論説は大抵此の類に屬す。又或る論者は分解の法を、現在の事實に施して、善たり、美たる者を究定するの難きを見て、之を人類の變遷に、體質に施し、善とは常に適當の義を示すの語にして生存競争の間に適種保生の理に因て生したる者なり。美とは神經の組織に斯斯云々の次第あるに因て起るの感なりと言へり、スベンセル以下の進化論者の保持する所是れなり。されど斯く論ずるは善美を以て只た此を思ひ之感する人の心中のみに存する者と爲し、人の未だ存せざる時より天地に先き立て存する者に非すと爲して、之を虚無に歸するの論なれば、其何たるを究定し得たるものには非ざるなり。されば善惡正邪の道定まらざる西洋諸國に於ては何に依て天下を治むるやと云ふに、現今は黨派を以て之を治む、腕力の争鬪を去ること僅に一歩なるのみ。改進黨守の權衡に因て政治を左右すること初見にこそ窺

巍堂堂たる事の如くなれ、其實を考ふれば恰も闇を引て大事を決するに外ならず、豈に君子の道ならむや。一方の黨の主義にして果して正しければ、反對の黨の主義は必ず邪ならざるを得ず、されば兩黨の權衡は畢竟正邪の權衡なるのみ、純全たる正道に非ざるなり、况や正邪の由て分るゝ所は必ずしも改進黨守の間、に非ざるをや。

第二節 保合分解の二論法

分解論の法に依て善美利正を究定せむとするの不可なる所以を概して言へば、左の如し。若し善美利正にして始より形象畫定せる者なりせば之を究定するに及ばざる理なり、今日に至るまで議論結了せざるは畢竟畫定せる形象なきが故なり。一切の有機物無機物は定形あり、又人倫上の事に至りても、無形は則ち無形なれど、其由て表るゝ所常に一定して動

かざる者有り、例へば資財ありて負債なきを富貴と曰ひ、他人の發明すること能はざる所を發明するを才智と曰ひ、他人に衣食を施與するを慈悲と曰ひ、既に存する契約に因て起る關係を權利義務と曰ふの類是れなり、故に此等の事に就きては議論結了し易し。之に反して善に美に至りては其由て表るゝ所常に一定せず、土地に時代に依て差同あるが爲に議論結了し難きこと知られたり。

然るに分解とは既に畫定せる形象の存する有ればこそ行はるゝことなるも、其存する無きに當ては之を施す可き地無し、是れ分解して善美を究定せむとするの不可なる所以なり。善なりとする一事一物を取て分解せば、其事、其物を善とする所以を知ることを得べきも、未だ善の何たるを得るに至らざるなり。

是を以て聖門に於ては分解の法を取らず、保合の法を取る。保合の法は

善と指し美と指す所の者を先づ工夫して設定し、而して後之を分解して其結構を説明するに在り。當今の分解論者は工夫といひ、設定といふ事を擯斥して架空の獨斷なりと言へり、何ぞ知らむ、人間世界の事事物物獨斷の工夫に出でざるは無きことを。試に彼の器具屋宇を見よ、是れ何を分解して得たる者とするや。木材の木材たる所以に於て必ず結合して器具屋宇を爲すべきの理無し、然れども之を取て舟車宮室を構成せば、誰れか其不可なるを咎めむや。又彼の夫婦を見よ、男の男たる所以、女の女たる所以に於て必ず一婦を娶て他婦を娶らざるべきの理無く、一夫に嫁して他夫に嫁せざるべきの理無し、而も一夫一婦室に居て他に求めざるの俗を爲せば、誰れか其不可を咎めむや。又彼の交易を見よ、甲者に一種の産物ある所以、乙者に他種の産物ある所以に於て必ず交易すべきの理無し、而も互市通商を行へば誰れか其不可を咎めむや。概して之を言へ

ば、工夫構成は人の人たる所以、即ち禽獸に勝れる所以なり。

さて一旦屋宇を構成したる上にて、其結構を分解して、間口と奥行と有る者なり、天井と床板と有る者なり、臺所、坐敷、戸棚等有る者なりと説明するは固より當然の次第なり、然れども未だ構成せざるの前に之を究定せむとするも何ぞ得べけむや。善美利正に至りても亦然り。夫の自由、快樂、進化を分解して善を得むとし、人の性情を分解して美を得むとするの徒は、木材を分解して屋宇を得むとする者ど何ぞ異ならむや。蓋し人たる者は皆多少工夫構成する所あり、或は他人の工夫構成せし所に照して善惡美醜を談する者なり。然れども斯の如きは未だ必ずしも完全なる構成と爲す可からず、或は立ち難く、或は改良を要する者なりや知る可からざるなり。何をか立ち難きの構成と謂ふ。曰く構成の中に甲乙矛盾して相容れざる部分ある事是れなり。之を屋宇に喩へて言へば、間口三間

奥行三間の内へ二十疊の坐敷を構へむとするが如し。或は又初は臺所の隣へ玄關を構へざるの工夫なりしも、玄關、客室、書齋、便所と建て列ねたる後に至り止むを得ず臺所を玄關の隣へ置くに至るが如きも構成の拙にして自ら破るゝ者なり。夫の功利論者の工夫に出づる善の如きは斯の如き者あり、即ち各人の幸福を先にすべしと言ふに構成を起しながら、最大数の最大幸福に説き及ぼすに至りては、少數に屬する各人の幸福を後にすべしと言へり、是れ矛盾に非ずや。されば首尾圓合といふ事は保合を完全する第一の要訣なり。

次に構成の拒絶する所に非ずして猶ほ且つ包容する能はざる所の者有るも、是れ亦不完全の一證なり。委しく言へば、先づ善を工夫したるに當り、之に照せば善に非ざる者は容るゝに由し無きこと勿論なれど、若し善と認むれど而も容るゝこと能はざる所の者あらば、是れ矛盾の一種にし

て、工夫の未だ周密ならざる證據なり。例へば親を尊敬するは善なりと認むるか、又不善なりと認むるかの一なり、さて恩に報いるを善とする點より言へば、孝は善なり、然るに天帝の恩は最も大なるが故に力を盡して尊敬すべき者なり、從て外に尊敬する所あるは不善なりとする點より言へば、孝は善に非ず、是れ基督教の善の工夫の自ら破るゝ所以なり。されば博。容。汎。納。といふ事は保合を完全にする第二の要訣なり。此等の事を精密に述べむと欲せば紙數を要すべければ、姑く聖門哲學の立つ所を理會するに必要な限りを茲に略言す、是れ一己の私言に非ず西洋人といへども智力卓越なる者は是認する所なり。

第三節 乾道總釋

進て聖門の善美利正の工夫を述べむに、先づ最初に古今東西に在りと有

らゆる萬事萬物を悉皆容納する物を工夫するが斯道の發端なり、此の物たる之を形詰せむこと難し、何となれば、一定の形象ありとするは、既に此の形象を納めて、之に反對せる形象を容れざるに等しければなり。是故に皆包は虚無に隣する者なり、然れども虚無に工夫を起さずして、之を皆包に起すこと、是れ聖門哲學の他に異なる所なり。此の物は之を稱して乾と曰ふ、易の説卦に「乾健也」と見えたるにて、其意味略は解す可し、健は健全なり、之を人體に繋けて言へば、一切諸臟其宜しきを得て何れの處にも故障無きの義なり。或は乾を天の用に比す、蓋し天は萬事萬物を悉納し運行息はず、應化窮りなければなり。又有徳の君萬人の上に立て、巨細の事務は之を百官に委ねながら、萬幾に心を用ひて晝夜懈らざるに象ざる。英語にては「ペルフェクト、バランス」完全 均衡とも云ふべきか。

聖門に於ては先づ斯の如き者を工夫し來り、さて善も美も利も正も皆此

の乾の内にての事物の相關係する次第なりとするなり。抑、善は何ぞといふに、此の乾に備はりたる博容の徳是れなり。能く容るゝといふ事を一方より見れば、能く立つことを得しむといふ義なり、故に萬事萬物を包容すとは、萬事萬物をして立つ所あらしむといふ事なり、是れ至善なり。されど古今東西の事物は皆趣を異にすれば、悉く之を包容するは難きに似たり。例へば商賈を利せむとすれば、商賈に善にして農家に善ならざるに等しく、婦女を利せむとすれば、婦女に善にして男子に善ならざるに等しからむとす。されば之を何如して可ならむやといふに、答て曰く、其法は事物の元を納むるに在り。大樹の條枝繁雜なるも其本を動かせば則ち全體を擧ぐるに足れり。故に易に元を乾の第一徳とす、文言に曰く「元者善之長也」と。本義に曰く「元者生物之始、天地之徳、无先於此」と。次に美は何ぞといふに、是れ善に由て出づる者なり。萬事萬物一一其趣

を異にしながら、一元の皆、包する所となるの事情は、之を一方より見れば、各事物、餘の衆事物を博容するの事情に異ならず、果して然るときは、各事物の爲に善とする所と、餘の衆事物の爲に善とする所と會通せり、是れ美の存する所なり。乾の第二徳を亨とするは此の故なり、亨は通なり、文言に曰く「亨者嘉之會也」と、莊氏の註に「嘉美也」と見え、本義に「亨者生物之通、衆美之會也」と見えたり、蓋し嘉が直に美なるには非ず、一物の嘉と他物の嘉と軋轢せずして會通するが即ち美なるなり。西洋の哲學に於て美の論盛なりと雖も、能く此の上に出づる者無し。音樂の美は音調の嘉の會なり、詩歌の美は節韻の嘉の會なり、繪畫の美は丹青の嘉の會なり。次に利は何ぞといふに、是れ美に由て出づる者なり。事物を容るゝに因て生ずる嘉は互に他の嘉を併せ享くるが故に理に於て最も深厚ならざるを得ず、故に斯る場合は是れ甲乙丙以下各一事物の爲に益する所も最

も大なるの場合なり。凡そ利の大なる、此の事情より出づる者に越ゆること無きは明白なり、故に易に利を以て乾の第三徳とせり。利とは物其性行を全くするの義なり、而して萬事萬物と並び立て性行を全くするの道は嘉會の外に亦有らざるなり、利は宜に通し、宜は義に通す、文言に曰く、「利者義之和也」と、本義に曰く「利者生物之遂、物各得宜、不相妨害」中略而得其分之和」と、今日の權利を説く者、只だ利の分を得るに在るを知て、分の和に因て大なるを知らず、故に取らむとして却て失へり。

次に正は何ぞといふに、是れ利に由て出づる者なり。嘉の會にして果して我が利の最も大なる所以なりとする上は、之に従はむと欲せば則ち我が分を守り、人の分を侵すことを避けざるべからず、正是に在り。固く分を守るを貞と謂ふ、是れ乾の第四徳なり、本義に曰く「貞者、生物之成、實理具備、諸在各足」中略而爲衆事之幹、幹木之身而枝葉所依以立者也」と。我が分を

全くするは利なり、然れども我が分を量り定めむには必ず先づ人の分をも測り知らざる可からず、人我の分を知る者にして始めて能く衆人の上に立て事を幹することを得べきなり、故に文言に曰く「貞者事之幹也」と。』以上は斯道の善美利正の工夫にして、聖門の保合論法を見るに足る者なり。蓋し論法と言へば西洋めきたる事の如く聞ゆれど、其實は只だ工夫の次第といふ程の事にて、苟も工夫有れば必ず一定の次第無かる可からず、朱子は小學に之を道と唱へたり、而して人の道理に愬へざれば之を制し難き今日に在りては、特に此の次第を以て一科の業として研究せむこと必要なり、況や聖門の保合論法は西洋に未だ其比を見ざる所たるをや或は言ふ希臘の「ロゴス」を今は分解論法の義とすれど元は保合論法の義たりしなりと、然りと雖も未だ元亨利貞の義有りしを聞かず、再考す可し今此の論法を西洋論理の區別に照すときは、元は純粹の保合なり、亨は保合的の分解なり、利は純粹の分解なり、貞は分解的の保合なり。然り而し

て貞に至れば又轉して元に歸るなり、貞下生元と言ふ是れなり。

第四節 保合論法を人倫に應用す即ち仁

義禮智の四徳

人或は言はむ易に元亨利貞を説くは卜筮の爲にせし者にして、保合の爲にせし者に非ずと、蓋し卜筮の事に關しては別に論ありて、乾は源を此に發する者なること疑ひ無しと雖も、孔子は之を論法として人事に應用し、之に基て天下の保合を工夫したるものなること文言傳に由て詳なり。請ふ之を述べむ。抑、人倫に就て言ふときは善は何ぞと問ふに、答て曰く元の徳に倣て人倫上一切の事物を包容するに在りと。されど人世の事物の極めて錯雜なる、悉く之を包容するは到底難きことならずやと問ふに、答て曰く、之を包容するの法は、前に述べたるが如く、元を納むるに在り、

人事錯雜は則ち錯雜なりと雖も、是れ皆元は人と人との關係より出でたる者なり、故に此の關係の善き所を修むれば、以て錯雜なる人事を統括するに足るなり、仁これなり、故に文言に曰く「君子體仁、足以長人」と、本義に曰く「以仁爲體、則无一物不所愛之中、故足以長人」と。儒道に於て仁を以て善の標準とする所以の者、只だ仁善なるが故に非ず、仁の外に善として萬事に耻ぢざる者亦無ければなり。仁の字は人二に从ひて二人兼愛に象ること夙に學者の注目せし所なり。

然るに仁博く天下に行はれて及ばざる所無きに至りたりと假定するときは、萬人皆我が包容する所と爲るが故に、從て其内の各人に於ても他の衆人を包容するに等しかるべし。即ち天下には君あり、臣あり、父あり、子あり、夫あり、婦あり、士農工商ありて、一一其趣を異にすと雖も、一人の仁全くして博く天下を容るゝに足るときは、君は君たりながら臣を容れ、臣も

亦臣たりながら君を容れ、父は子を容れ、子も父を容れ、士農工商も亦皆相容れて互に扶助し各、他をして立つ所有らしむるなる可し。凡そ人人交際の美は、能く此上に出づること無けむ、禮節の由て立つ所是に在り。文言に曰く「君子略嘉會、足以合禮」と。朱子語類に曰く「蓋其厚薄、親疎、尊卑、小大、相接之體、各有節文、無不中節、即所會皆美、所以能合於禮也」と。是れ禮樂の哲理なり、禮豈淺薄ならむや。胡煥文が「禮者仁之著」と曰ひたるも能く此の理に當れり。冠婚葬祭の時に擧げ行ふのみが禮の本旨に非ず、禮の基く所は衆人相聚て民を爲し國を爲すの道に於て缺く可からざる所たる保合の至理に在るなり。

然るに斯く衆人相容れ相助け、力を協して生計を營むときは、各人の得る所も亦最も大なるべし。利の最も大なる者は禮に依らざれば生せず。此の利貞の利の字を直に人倫に用ふることもあれど、大抵は義の字を用

ふ、今は義の字に自己の利とする所といふ意味なきが如くなれど、古は有りしものと見ゆ、即ち易に「利見大人」などあるの利は、自己の道の爲に利なるを言ふにて、文言に直に之を「義之和」と説けり、又曰く「君子略利物足以和義」と。今日も權利と言ひ、又權義と言ふは自己に對することなり。或人程子に問て曰く「義安處便爲利」と、程子答て曰く「義截然而不可犯、似不和、分別後萬物各止其所、却是和、不和生於不義、義則無不和、和則無不利矣」と、是れ確論なり。

然るに萬人萬事其宜を得て相乖戾せざるが如き配合の法ありとし、其間に立て利を全くせむが爲に上に言ふ所に從ひ善く自己の分を守り、敢て他人の分を侵すこと無く、他人をして自己の分を侵さしめざらむと欲せば、先づ衆人の分を明細に知らむことを要するに至れり。是れ智を以て四徳の一と爲す所以なり。朱子語類に曰く「貞者事之幹、萬物至此收斂成

實、事理至此無不的正、故於時爲冬、於人爲智」と。

或は貞を以て智に配せずして信に配すべしといふ論もあり、孰れにしても元亨利貞が即ち仁禮義智なるには非ず、之に準して人倫を工夫すれば則ち仁禮義智を得るなり、而して此の四徳を行ふ人を君子と曰ふ。此に乾の文言傳の全文を掲ぐ、

元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也、君子體仁、足以長人、嘉會足以合禮、利物足以和義、貞固足以幹事、君子行此四徳者、故曰乾元亨利貞

之を西洋倫理の區別に照すときは、仁は純粹の他愛主義なり、禮は他愛的の自愛なり、義は純粹の自愛なり、智は自愛的の他愛なり。されば西洋家の論説は既に聖門哲理の悉く包納する所たり、見る可し乾道の美にして大なるを。

第五節 保合論法を天下文明の次第に應

用す

前段には仁禮義智の哲理を述べたれど、此の四徳は是れ只た人倫の形にして、實に非ず、若し此の論を此に止めて實に及ばざるときは、之を目して孔子架空の一家言なり、人世の至理を盡せる者に非ずと做すとも敢て之を拒否し難かる可し。されど果して人世の至理に合する者たる證據あるは、他無し、人倫の實。即ち人の集て國を爲し民を爲すの次第も元より亨の出で亨より利の出で利より貞の出づる次第と符合することは是れなり。委しくいへば乾元論法にして果して能く保合の至理を盡せる者ならむには人世自然の保合即ち天下文明の次第も自ら此の論法の次第と符合すべき道理にして、支那の傳記に就て考ふるに、果して十分に符合する所

有りとなり。

(二) (元) 器制 支那に於ては誰れを以て最初天下を開くに力ありし人なりと

するやといへば、包犧、神農、黄帝これなり、さて何を以て然りとするやといへば、種種の器械を制作せし事これなり、是れ甚た緊要なる一點とす。

易の繫辭に曰く、古者包犧氏之王天下也、略中作結繩而爲罔罟以佃、以漁、略中包

犧氏沒、神農氏作、鋤木爲耜、揉木爲耒、耒耨之利、以教天下、略中又神農氏沒而黃

帝堯舜作、略中斷木爲杵、掘地爲臼、等皆制器の跡なり。家屋も機械なり、故に

又曰く、上古穴居而野處、後世聖人易之以宮室、上棟下宇以待風雨、略中包犧、

神農、黄帝は後世聖人君子と稱せらるゝ人の如き仁徳ありしに非ず、自ら聖人たらむことを欲して耜耒杵臼を制作せしに非ざるや未だ知る可からずと雖も、其制作せし所計らず保合の元となり、天下是れより文明せしが故に、其文明の流を汲む後世の人より聖人と仰ぎ尊ぶなり。繫辭に曰

く「備物致用立成器以爲天下利莫大乎聖人」と。制器は財を得る所以にして、財は人を聚むる所以なり、故に今之を以て人倫の善たる元の位に置く。繫辭に「何以守位曰仁、何以聚人曰財」と有る是れなり。人我を愛して衆を聚むるの第一策は財を得しむるに在り、自餘百事は皆此の一事に因て生すべし。(由是觀、是今日の物理上の諸學は天下文明の第一着なり、文理を論する者往往物理を斥けむとするは誤てり)。

(二) 亨交 器械既に成り、各人の衣食畧は足れるに及びて次に取る可き保合擴張の策は何ぞといふに、各人の宜しきに從て用ひる所の器械を異にせしめ、以て得る所を交易せしむること、是れなり、斯くするとき、各人の得る所更に多からむとす。故に易に「神農氏耒耨之利以教天下」の次に「日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所」の一段を置けり。交易の道開くれば則ち罄く者は取る所有り、積む者は散する所有りて、互に嘉

ばざるは無し、是れ嘉之會に非ずや、故に之を亨の位に置く、交易は理財の美なり。神農氏没して後、黃帝堯舜作り、更に交易の道を擴張したり、「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利以濟不通、致遠以利天下」と云ふ是なり。「服牛乘馬、引重致遠、以利天下」も亦然り。(由是觀、今日の經濟上の諸學は天下文明の第二段にして、斯道の缺く可からざる所なり、世の學者往往財貨を卑しむは誤てり)。

(三) 利非 交易の道既に開けたる上にて、次に進て保合を擴張するの法は何ぞといふに、是れ恰も衆人産物を受授する間に人我の分なる者あることを知るに至りたるの秋なれば、此の時に乘して少なく與へて多く取ることを禁するの策を立つれば、則ち衆庶の一致更に親密ならむとす。易に此の事を「禁民爲非曰義」と説くゆゑ之を利の位に置く。繫辭の服牛乘馬の次に「重門擊柝以待暴客」とあるは非理強奪を防ぐの策なり。「弦木爲

弧、剡木爲矢、弧矢之利、以威天下、二とあるも亦然り。(是れ後世の刑罰兵備の張本なり、此の二者も斯道の必須たることを知る可し)。

(四) 〔貞〕書契 禁非の事既に行はるゝに及て、更に保合を擴張するの道は何ぞといふに、是れ恰も衆人の上に在て人我の相共に遵奉せざる可からざる所たる者有ることを人皆悟知するの時なれば、此の機に乗して衆人の上に立て之を統御するの策を設くるときは、治平更に完全ならむとす。

此の策に二有り、即ち辭を正して非を爲すことを禁するの具たる文字と、此の文字に準して決斷するの人たる百官と是れなり。繫辭の九事の最後に於て、上古結繩而治、後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察の一段を掲げたるは是の故なり。書契百官は法度の張本にして、萬民をして各自の分限の存する所を察することを得しむる所以の者なり、故に之を貞の位に置く〔結繩〕の事、古人の註解、一定せず、案するに諸邦の野蠻人中に於て今尙ほ見る可きが如く、繩の結び目を以て數を表して忘却に備

言ふるの習慣を言ふるなるべし。

以上は易の繫辭下傳の著明なる一章に依て述べたる所なるが、次に進て文明の第五段に至るの前に聊か聖門哲學の工夫に關して言ふ可きこと有り。凡そ人の此の世に出づるや、必ず先づ衣食を求めざるは無し、故に其衣食を求むる所に就て土木の宜を計て器用の利を制せば則ち我れも人も之に由て富み、而も相害すること無し、是れ聖人作爲の發端なり。衆人器械の利用に通して得る所多きに至れば、次に取る可き法の自然にして且つ最も簡易なる者は、人と人との財貨の交易これなり。他の道より入て人と人とを團結せむとすときは或は背く者あるべけれど、財貨を交易せしむれば互に得る所あるが故に、此の道より入れば背く者無し。さて斯く弘く衆人と交易すること起るときは、是に至り始めて衆人と交易しながら各人の利得を全くするの難きに非ざることを知る可きなり。

交易の道未だ開けざるの前には、人我の關係不定なれば、眞に自己の利たり義たる所を知る事難し、蓋し利も義も自己に屬する所を、他人に屬する所に對して云ふことなればなり。交易に因て此の念の生したるときは、則ち一步を進めて利と利とを交易するの念を生せしむ可きの機至れり、利と利との交易とは何ぞや、曰く我れ汝の利とする所を全くすべければ、即ち侵さざるべければ、汝も我れの利とする所を全くすべし、即ち侵す勿れと約することは是れなり、是れ方正貞固の念起るの時にして、人我一致して正義の保管たる法度を遵奉するに至るの秋なり、若し此の順序を履まずして、或は始めより利を教へ、或は利の念の未だ生せざるに當て正を知らしめむとするときは、保合進まず、人文開けざるなり。聖人の道は先づ第一事を施し、第一事既に窮りて民之に倦み、更に他事を求むるの機を觀て、次に最も移り易しとする第二事に移らしめ、第二事も亦窮まれば更

に其次に最も移り易しとする第三事に移らしむるに在り、之を變通と謂ふ。聖門の哲理に暗き者は妄りに以爲く、因循姑息これ儒道の大旨なり、進歩の反對なりと、豈に誤たずや。今の改進を論する者、只だ變を知て未だ通を知らず、通とは變前變後の間に氣脈貫徹するを謂ふ、誰にまれ此の氣脈を察して變を此に起す者は聖人なり。舊きを守れば則ち倦み、新しきを更むれば則ち宜しからざるは凡そ事の情なり、其舊きを變して民をして倦まざらしむる者は化なり、新しきに趨り民をして成な宜しからしむる者は神而化すなり。俞琰曰く、時當變則變、不變則窮、於是乎有變而通之道焉、變而通之、所以趣時也、民之所未厭、聖人不強去、民之所未安、聖人不強行、夫唯其數窮而時將變、聖人因而通之、則民不倦、由之而莫知其所以然者、神也以漸相忘於不言之中者、化也。折衷卷十五九變通の理は歐米學者の間に見ざる所にして、支那の保合論法に特異の一點とも謂ふ可き者なれば、別冊に於て

更に論究して西洋學者の所謂變化と異なる所以を示さむとす。

(五)元^先王^先 さて本論に立ち歸りて説かむに、書契を以て正義を述べ、百官を置て公道を布き、衆庶之を遵奉するに至るときは、次に保合を進むるの道は何ぞといふに、善く人我の分を知る人に於て百官を主宰すること是れなり。貨殖の業に於ては人人營畫する所を異にするも可なり、政治に至ては一人の意に出づるに非ざれば矛盾を免れ難し。文明進て此の點に達するときは、一旦元に戻るものにして、是に於て聖天子の出づべきの機至れるなり、繫辭に「黃帝堯舜垂衣裳而天下治」と曰ふ即ち是れなり、之を以て保合の第五段とすべき所以の者は、繫辭に黃帝の次に直に堯舜を擧げたるにても知る可し。黃帝と堯舜との間に人君無かりしに非ざれども擧げて言はざる者は、人倫保合の路に於て大功あること無く、只だ黃帝の遺業を繼續して非を禁し分を正したるのみなればなり。天の如き仁神

の如き知を以て九族を親くし、百姓を章にし、萬國を合和し、昊天を敬順したるは、功化の大なる者なり、歷山畔を讓り、雷澤居を讓り、一年聚を成し、二年邑を成し、三年都を成したるは功化の美なる者なり。禹湯文武の治業に至りても亦然り。儒道に於て先王の徳行を尊て斯道の緊要なる一部と爲す所以の者、其人文を進むる事の上に於て斯く重大なる程度を畫すればなり。二帝三王の徳行は一方より見れば一人一己の言行なりと雖も、又他の一方より見れば則ち然らず、此の時は君臣上下分を得るの和始めて出でたるの時なれば、此の機に乗して君臣上下を保合するに適當せる徳行を示せしは、恰も新たに人倫保合の器械を制作したるに異ならず。堯の如きは則ち民を治むる所以を制作し、舜の如きは則ち君に事ふる所以を制作せしものなり。父子夫婦の倫序を構成したるも此の時に在り、百姓九族の事は言ふもさらなり、孝悌の道を以て天下を結ぶの制も此の

時の工夫に係るものとす。伊訓に「立愛惟親、立敬惟長、始於家邦、終於四海」と有るも後に孔子の徒が敷衍して孝經一篇の主旨と爲せし所なるべし。孟子曰く「堯舜之道孝悌而已矣」と。

(六) [享] 聖天子に立て天下を治め、野無遺賢、萬邦咸寧と言ふが如き時勢に浴するとき、君は民の愛す可きを思ひ、民は君の敬す可きを思ひ、父は子の育す可きを思ひ、子は父に孝なる可きを思ふべし、況や夫婦に於てをや、況や朋友に於てをや、互に思ひ邪無からむとす、思ふ所心に在れば必ず言に發し、述ぶるに句調の美を以てして口傳に便にす、詩是れなり。詩は君臣父子夫婦朋友の志を交易する所以なり、故に今之を享の位に配す。此の時は王道の外に未だ學教と謂ふ者有らず、然れども學教の實は既に斯く君臣父子夫婦朋友の志を通するの間に自然に存して、夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美にする所以と爲れり。斯道に於て風雅

頌を重する所以の者はに在り。大學衍義補に曰く「先王盛時諸侯歲朝于天子、考禮正刑以一其德、天子於是考之正之、而加賞罰焉、諸侯既朝之後、天子五年一巡守、又命太師陳詩以觀民風、其君德之善否、其國政之得失、其民風之美惡、見於民俗歌謠之間者、皆得以上聞、或刺或美、天子因之而施黜陟刑賞之典焉」と。

(七) [利] 王道行はれ萬邦寧きこと久しく續くときは、治平に安するよりして、上下ともに奢侈怠慢に流れ、治平の源は上下貴賤の相容るゝに在ることを忘れ、他人の名分を侵して、自己の情慾を逞くせむとする者出づ、然るときは、王道の行はるゝ時に於ての如く人倫の厚き所を嘉ぶの志を詩に述べずして、其薄き所を憂ふるの志を詩に述ぶる者出づべし、五子之歌の類是れなり。斯く無道を怨むの志を述べたる詩の中に就て最も綿密なる者を孔子の春秋とす。何を以て春秋の詩たるを知るやといふに、書

に「詩言志」とありて、孔子「吾志在春秋」と曰ひしを以てなり。孟子曰く「世衰道微、邪說暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔子懼作春秋」と又曰く「王者之迹熄而詩亡、詩亡然後春秋作」と、大學衍義補亦之を論じて曰く「至于周衰、諸侯不復朝覲、天子不復巡守、太師不復采詩、而民間之美刺、不復上聞、天子之賞刑、不復施於列國矣、所謂詩亡也、孔子乃假魯史以作春秋、因諸侯之行事、加以筆削之公、而寓天子刑賞之意焉、蓋詩列十有一國之風、春秋亦紀二十有三國之事、詩有美刺、春秋有褒貶、此春秋之作、所以繼詩亡之後也歟」と。春秋は名分を正す者なれば利の位に配す、是れ詩より文章に移るの點なるべし。

(八) 貞十翼 然るに名分を明にし天下の邪正を定めむと欲せば必ず先づ邪正の分の依て立つ所たる倫理の全體を明示せざる可からず、是れ即ち孔子の書と詩とを述作せし所以なり。孔安國曰く「典謨訓誥誓命之文、凡百

篇、所以恢張至道、示人主以軌範」と、史記に曰く「古詩本三千餘篇、孔子去其重、取其可施於禮義者三百五篇」と、是れ蓋し當時世人の正道と爲す所の者は、典訓誓、風雅頌の外に求む可き所無かりしを以てなるべし。然るに既に書に詩に照して斯道を明示したる上は、更に進て之を天理に徹せざる可からず、然らざれば我を目して邪說と倣す者を服し難かるべし。是れ孔子の最後に十翼を作り、易道を贊明して、聖人君子の道を辨したる所以なり。春秋は「議而不辨」莊子易に至りて始めて之を辨したり、王通の語に「春秋其以天道終乎、故止於獲麟」と見えたるも面白し。孔子曰く「加我數年、五十以學易、可以無大過矣」と。易は人道を明にして固く之を守る所以の者なれば、今貞の位に置く。是に至て又元に返る。

(九) 元師 右二段に述ぶる所に依れば孔子の斯道に於て大功ありし所以の者明白なる可し。先王の道の衰へたるに際して、懼れ怨む者は多く有

りつるべけれど、其懼れ怨む所より變通して再び正道に反るの路を開きし者は、孔子の外に有らざるなり、作易者其有憂患乎と曰はれたるにても、志のほご思ひ知られてめでたし。然るに孔子の功業は只だ是れのみならず、既に上は天地の象に則り、下は先王の治平に照して君父の道を辨明し、之を書に載せて廣く天下に示したるに因り、其勸懲する所自ら凝結して一定の學説を爲したり、是れ師儒の權輿にして、孔子の自ら勉め、後に門弟子をして専ら勉めしめたる所なり。仁義禮智の論是に至て盛なり。學教の學教として出でしは即ち此の時に在り。

大學、中庸と孝經とは此の時に孔子及び門弟子の手に成りたるの書にして、論語、孟子之に次ぐなり。四書孝經の事は諸家の高論あれば今敢て辨せずと雖も、之を要するに儒學も亦自ら一種の制器にして、人倫と天道とを保合するの工夫に出で網罟、舟車の發明と其徳を一にする者なれば、今

之を元の位に置く。

凡そ學教なるものは直に人の靈心に懇へて道を立つる者なり、大學は正心を本とし、中庸も天命の性を言へり、されば個人の心意を以て保合の根據とすること、是に權輿す、此の事後に至り緊要の一點となれば預め一言するなり。

(十) 〔亭〕記禮 さて學教一旦出づるときは、人皆其意を解して言行を修むるが故に、再び尊卑上下相喜ぶこととなれり、是に於て其言ふ所、其行ふ所自ら文章を爲す、之を集めて一體の經籍と爲したる者は禮記これなり。されば禮記は四經の後に**出づ可き者**なるのみならず、又必ず孔子明教を垂るの後に**出づべきもの**とす、事實を見るに果して然り。程頤曰く「禮記雜出於漢儒、然其間傳聖門餘緒及格言甚多、如樂記、學記之類、無可議者、檀弓、表記、坊記之類、亦甚有至理」と、又曰く「禮記除中庸、大學、惟樂記爲最近道」と。曩

に禮記を讀むや、未だ程頤の此の語あるを知らずと雖も、易の繫辭上傳の初と比照して樂記は天地萬物の道に依て禮樂の立つ所を辨明するの一章なることを知りたり。左の數句の如きは實に美を極めたりと謂ふ可し。

「樂者爲同、禮者爲異、同則相親、異則相敬、樂勝則流、禮勝則離、合情飾貌者禮樂之事也、禮義立則貴賤等矣、樂文同則上下和矣、好惡著則賢不肖別矣、刑禁暴爵舉賢則政均矣、仁以愛之、義以正之、如此則民治行矣」樂由中出、禮自外作、樂由中出、故靜、禮自外作、故文、大樂必易、大禮必簡、樂至則無怨、禮至則不爭、揖讓而治、天下者禮樂之謂也、暴民不作、諸侯賓服、兵革不試、五刑不用、百姓無患、天子不怒、如此則樂達矣、合父子之親、明長幼之序、以敬四海之內、天子如此則禮行矣」大樂與天地同和、大禮與天地同節、和故百物不失、節故祀天祭地、明則有禮樂、幽則有鬼神、如此則四海之內合敬同愛矣、禮者殊事

合敬者也、樂者異文、合愛者也、禮樂之情同、故明王以相沿也、故事與時並、名與功偕」。

「天尊地卑、君臣定矣、卑高以陳、貴賤位矣、動靜有常、小大殊矣、方以類聚、物以群分、則性命不同矣、在天成象、在地成形、如此則禮者天地之別也」地氣上齊、天氣下降、陰陽相摩、天地相蕩、鼓之以雷霆、奮之以風雨、動之以四時、煖之以日月、而百化興焉、如此則樂者天地之和也」。

右は禮樂の立つ所、人の私意に在るに非ずして、天道の中和に在るものなることを辨明し、さて箇人の性情に説き及ぼして禮樂の捨て難きを説明する者なり。禮樂は人の志に翹へて學教を立つるに於て詩と徳を同くするが故に、今之を亨の位に置く。

〔子利〕門 立教の精神に因て禮樂普く行はれ、萬邦咸な寧きこと久しきに至るときは、終に治平に安して、虛文に流れ、禮樂の外形のみを守りて、精神

を忘るゝに至れり、是に於て學教亂れて家家異論を唱へ、門を張て相攻撃するに至る、即ち是れ學教の春秋とも謂ふ可きの時にして、宋の景祐以後、歐陽修、范仲淹、王安石、司馬光、周敦頤、程氏兄弟、蘇軾、朱熹、呂祖謙等の學者相踵て起り、頻りに論說を戰はしたる比に當れり。蘇軾曰く「自漢以來、道術不出於孔子、而亂天下者多矣、晉以老莊敗、梁以佛亡、莫或正之、五百餘年而後得韓愈、學者以配孟子、蓋庶幾焉、愈之後三百有餘年、而後得歐陽子、其學推韓愈、孟子以達於孔子、故天下翕然師尊之、曰歐陽子、今之韓愈也、宋興七十餘年、民不知兵、富而教之、至大聖景祐極矣、而斯文終有愧於古士、亦固陋守舊、論卑而氣弱、自歐陽子一出、天下爭自濯磨、以通經學、古爲高、以救時行道爲賢、以犯顏納諫爲忠、長育成就、至嘉祐末號稱多士、歐陽子之功爲多」と、是れ蘇軾當時を稱美するの語なりと雖も、亦以て斯文衰頹、門派岐立の事情を觀るに足る者とす。此の時代は之を稱して學案時代と曰ふも可なり、蓋し宋元學

案、及び明儒學案に載する所、某先生の學案、某先生の學案と言ふ事を唱へ、學說相傳の系譜を重するに至りしは、此の時を權輿とすればなり。暴客作らざれば書契百官出でず、戰國起らざれば書詩十翼出でず、何ぞ知らむ門派の起るも亦天下文明の次第に於て缺く可からざる事たるを。

(五)眞理性 されば斯く家家異見を戰はしたる後の結果は何ぞといふに、是れ全く一個一個の人の靈心と靈心との争ひなれば、之を鎮定するの道は個人の靈心の立つ所を審にし、其能く正理を知る者たる事を證明するの外無きなり。此の事を證明せむが爲には先づ人の萬有の間に於て占むる所の地位、即ち性命の理を窮めざる可からず、故に宋儒の紛紛たる議論は終に性理の議論と成りたり。其最も著明なる者を周敦頤の大極圖と爲す、即ち人極といふ者を立て、易の大極に通するの徳ありとし、以て人性の中正を説きたる者なり。曰く「無極之眞、二五之精、妙合而凝、乾道成男、

坤道成女、二氣交感、化生萬物、萬物生生而變化無窮焉、惟人也得其秀而最靈、形既生矣、神發知矣、五性感動而善惡分、萬事出矣、聖人定之、以中正仁義而主靜、立人極焉、故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶」云。程頤は曰く「天之賦與之謂命、稟之在我、之謂性、見於事物、之謂理、理也、性也、命也、三者未嘗有異」と。

(十三) 元 聖神 功化 さて性理の學既に完備成功したりと假定せば、其後は何如に成り行くべきやといふに、是れ即ち純粹の道理に依て天下を經綸するの時なるべし、支那に於て果して此の時有りしや未だ知らず、大學衍義には性理に基て天下を治むることを稱して聖神功化と曰ふが故に、此に姑く之を以て保合の第十三段とす。

以上畧述する所に依て支那の傳記に見えたる天下文明の次第は元亨利貞の順序に従ふ者なること明瞭なるべし。然るに茲に一條の問題を生

するは他無し、第八段に於て孔子十翼を作り、天地の象に則り、先王の行に照して君父の道を辨明したることを述べたるが、此の辨明にして果して完全なりせば斯道は此に於て靜定に歸すべき理なるに、雷に動て四書、孝經、禮記を出したるのみならず、又第十一段以下に述べたるが如き變あらしめたるは何の故ぞや、是れ果して孔子の辨明の完全ならざりしに因るかといふ疑難これなり。此の疑難を解答せむと欲せば易理に涉らざるを得ざるを以て、姑く別冊に譲る。

附 錄 終

大正七年十一月廿五日印刷
大正七年十一月廿八日發行



著者
發行者
印刷者
印刷所

支那正觀典付
定價金壹圓貳拾錢

東京市小石川區茗荷谷町五十六番地
有賀長雄
東京市麴町區下二番町六十八番地
上原好雄
東京市麴町區下六番町十七番地
松澤珏三
東京市麴町區下六番町十七番地
同 勞 舍

東京市麴町區下二番町六八

發行所

外交時報社出版部

振替東京六〇二〇番
電話番町五〇二九番

384

13

終

